

第一章 狂欲の淫獄界

……性欲とは、生物の根源を成す上で、食欲や睡眠欲といった本能的欲求に匹敵する必要不可欠な要素であることは、もはや論じる必要もないであろう。性的な興奮、あるいは欲求は、次世代に種を受け継がせるための生殖行為を強く促す力として、雌雄別体のあらゆる生物に本能として宿っており、自然界の中でそれらが爆発する時期は、「繁殖期」あるいは「発情期」等と呼ばれ、種による一大生殖行為へと繋がってゆくことは、もはや自然科学の常識と言っていいだろう。字面だけ目にすれば、邪まな想像力が働く事案ではあるのだが、自然界における生殖行為は種の繁栄に直結する重要な行為であるため、それは神聖視されて然るべきだ。

ところが、この性欲が、生殖行為あるいは繁殖行為に直結しない生物が自然界には存在する。それは、人間である。この世界に存在する数多の生物の中で、唯一、人間だけが、性欲を、繁殖や生殖には結びつけず、己のドス黒い欲望を発散する手段として用いているのだ。

人間という種は、しばしばこの世界における異質な存在として語られることが多い。自然を破壊し、資源を消費し、自らが苦しむと知りながら、海や大気を汚して止めようとしめない。食欲を満たすために特定の種が絶滅するまで乱獲することもしばしばであり、人間の手によって亡ぼされた生物や間接的行為によって全滅した種の数は、おおよそ数百万では足りないであろう。人間が地球の「癌」と呼ばれる所以だ。

しかし、大局的視点からすれば、人間のこれらの行為は決しておかしなことではない。生物に備わった本能は、他種を虐げても繁殖することに重きを置いており、それは目立たないだけで、他の生物にも備わっているからだ。ある種の昆虫は存在する全て食らい尽くしながら大群を成して移動を続けるし、動物も自分たちの種が存続するためであれば、他の種が減びることをいとわずに食べ物奪い、飲み水を平気で奪う。それらは生存競争と言って、人間が生まれる遙か数億年前からこの地球上で繰り返されてきた生命の営みであり、人間の行為も、その一部でしかないのだ。ただ人間だけが、自らの行為を恥じて顧みるという知的頭脳を有しているため、異質な存在として映る（それも自分たちの視点を通じて）だけであり、長い地球の歴史からすれば、弱肉強食こそ自然の理であって、他種に対する制圧行為は決しておかしなことではない。むしろ人間の奇異的な部分は、他種を滅亡から救うため労力を費やしている点にある。この地球上の歴史を鑑みて、人間以外に、他の種を絶滅から救うべく、知恵を絞り、技術と情熱を消費し、滅びゆく種に手を差し伸べた生物が他にいるであろうか。答えは、否である。人間以外の生物が、滅亡する他種に手を差し伸べた事例は決してなく、他の生物であれば、自分たち以外の種が減びたとしても、悲しんだり哀れんだりするどころか気にも止めないはずである。もし仮に、明日人間が減びることになったとしても、それを「罰」だと思ふのは当の人間だけであって、他の生物たちは、人間の滅亡を「自業自得」とすら思わないはずだ。ただ、害敵が消えたことを大喜びはするだろうか。さて、話が少し逸れてしまったが、人間の「異質性」と「性欲」に関して、いま少し語っていきたいと思う。

先にも述べたように、自然界における人間の行為は、一見すれば

悪逆非道の暴虐と言えるかもしれないが、自らの種を繁栄させるための正統な行為であって決しておかしいことではない。むしろ、自らの行為を恥じて、その罪を償うため、他の生物を存続させたり、絶滅から救ったりする行為こそ、他の生物から見れば「異質」と映って然るべきはずである。

これは人間だけが有する高い「知能」によって成せる「御業」と言える。人間は、よく、他の動物が音を使ってコミュニケーションを取っていることや、高い社会性を有していることを発見して驚いているが、他の生物からすれば、高い「知能」を駆使して数千キロの距離をわずか数時間で移動できる機械を発明したり、機器を用いて地球の裏側にいる仲間とコミュニケーションをとったり、種の存続のために他の惑星への移住を真剣に検討していることにこそ驚嘆するはずである。

人間の技術の進歩と社会の発展は、生活の利便性を極限まで追求した形といえるが、決してそれだけでないのもまた事実である。知的生物である人間は、古来より自らの「頭脳」を満たすことで幸福を感じてきた生き物である。技術の進歩や社会の発展は、利便性を追求するだけでなく、頭脳の空腹を満たす行為にも繋がっており、それは人間という種に大いなる喜びを与え、さらなる進化を促し続けてきた。そしてその頭脳の一端は、本題となる「性欲」にも直結しており、人間という種に他生物では想像もできないような変態的性産物をもたらし続けてきた。それは、人間という種にとって、「性欲」とは、子孫繁栄のための生殖行為だけでなく、自らの頭脳を満たすための要素にも繋がっていたからだ。

例えば、通常の性行為だけでなく、同性間での性行為や、排泄器官を通じての性行為、さらには幼体に対する性行為、あるいは他生

物を使った自慰的行為は、他の生物でも時々見られる行為だが、人間の変態的「性欲」はそれらを簡単に凌駕してしまっている。

自分が快樂を得るために、異性を拘束し、嫌がる相手を無理やり強姦することなど優しい方で、人間は自らの性欲を満たすために、おおよそ想像を絶するような性的行為の数々を編み出してきた。異性を拷問し、苦痛に悶え苦しむ相手を見ての自慰行為。眼球を剝り貫いて空洞となった眼窩を犯す眼姦。女性の性器に腕を突っ込むフイストファック。尿道を拡張してソコに性器を突っ込む尿管姦。拡張した女性器に頭部を挿入するスカルフアック。生殖器官や排泄器官に昆虫類を大量注入する蟲姦。動物を使って性行為を愉しむ獸姦。頭蓋骨を剥いで剥き出しになった脳ミソに性器を突っ込む脳姦。妊娠した女性を家畜のように扱って搾乳したり、その逆に男性から精液を搾り取ったりする搾乳・搾精プレイ。流血に性的な興奮を覚える者も居れば、虐待を受けて喜ぶ者もあり、性的倒錯によって性転換を決意する者もいる。快樂を得るために薬物を摂取するのは日常茶飯事で、自らの身体に改造を施す者も少なくない。叫び声や喘ぎ声、悲鳴や絶叫、哀願、あるいは懇願に性的な快感を見出す者もあり、そのために身体的、精神的、あるいは社会的な虐待を加える者も数多い。どれもこれも異質であり、異常であるのだが、この変態的性癖の数々は、全て人間が頭脳の一端を占める性欲を満たすために生み出してきた産物であり、それはもはや異次元の領域に至っていると言っても過言ではなかった。

いや、実際に、人間の変態的なまでの性欲は、積み重なって、あらゆる種の世界を構築するにいたっていた。それは人間の性的欲望が渦巻く世界であり、具現化した世界であった。

尽きることのない人間の性欲は、常に激しく、より過激な行為を

求め、そして欲してきた。その中には、想像の世界、あるいは次元の世界でのみ可能な性的行為もあって、例えば胎内回帰とか、ニプルファック等と言った行為は、現実世界では不可能な行為であるが、求める者は決して少なくない。それが、ある種の悲劇を生む。この尽きることのない欲望が、ソレを欲するあまり、叶えようとするあまり、それらを可能にする世界を、次元の向こう側に、異次元世界のその中に、無意識の内に創り出してしまっていたのだ。

それは、人間が神を創造する行為に似ていた。

一部の人間すら知らないその世界は、あえて名前を付けるとするならば、「淫獄界」という名前こそふさわしいであろう。そこは肉と欲に満ちた世界であり、生も死も存在しない混沌とした世界である。そこでは、欲望の発散こそが真理であって、異常な性行為こそが摂理であり、非常識こそが常識なのであった。

その世界——淫獄界は、それ自体がある種の意志を持っているかのごとく、虎視眈々と獲物を捕らえる機会を伺っている。生みの親である人間たちに気づかれぬよう、次元の向こう側から穴を開け、触手を伸ばし、人間世界で獲物を捕獲する隙ができるのを執念深く待っているのだ。そして、運悪く淫獄界に捕らわれてしまったが最後、その哀れな獲物は、死ぬことが許されなのまま、永久に、変態的性行為の犠牲となる運命を辿ることになるのである。

そして、今宵もひとり、哀れな犠牲者が、淫獄界へと誘われようとしているのだった……。

第二章 アシュリー・柏木・ポートマン

……アシュリー・柏木・ポートマンという名前を聞けば、まずは誰もが「二世」という称号を思い浮かべるに違いない。天才マジシャンとして知られるグレイブ・ポートマンを父に持ち、名女優として活躍した柏木加奈子を母に持つ彼女は、現在、グラビアモデル兼マジシャンとして売り出し中の「二世タレント」であるからだ。

幼少時代を父親の母国であるアメリカ合衆国フィラデルフィアで過ごしたアシュリーが日本にやってきたのは彼女が一二歳の時であった。その原因は、父親の破産と自殺にあった。

父親のグレイブ・ポートマンはマジシャンとしての腕前は超がつくほど一流であったが、人材鑑定能力と投資能力は三流以下であった。彼は親しくしていた友人から自称・天才投資家だという人物を紹介され、彼の甘言に乗り、財産のほとんどを複数の新興企業の株式に投じてしまった。

「絶対に儲かりますから」

「あなたには決して損をさせませんよ」

「投じた資金は倍、いえ、数倍になって帰ってきます」

「どうぞ大船に乗ったつもりでいてください」

という、絶対に信じてはいけない言葉を、グレイブ・ポートマンは信じてしまったのだった。

その結果は散々な有り様であった。船は大船どころかドロ船であり、グレイブが株を購入した新興企業はそれから間もなく次々と倒

産して、彼はわずか一年足らずで資産の大半を失ってしまったのである。当然、自称・天才投資家とも連絡が取れなくなり、グレイブは精神的に追い詰められた。

それでも、彼にはマジシャンとしての道が残されていた。一流マジシャンである彼は、投資で失った損失を取り戻そうと、あえて過激で、危険なマジックに挑戦し、そして生涯で初めてとなる失敗をしてしまった。

それは観客を巻き込んだ水中脱出マジックだったのだが、些細なミスが原因となって、観客を溺死させてしまったのである。投資失敗による精神不安が失敗を増長させたと思われるが、それは定かではない。しかし、この一件で、彼の名声は地に落ちた。新聞や雑誌には連日のように「人殺し」の文字が踊り、遺族からも多額の賠償金を訴えられたグレイブは、妻と別れ、拳銃で自殺を遂げたのであった。

そのような経緯から、アシユリーは母親と共に日本へとやってきたのだが、彼女の波乱はまだまだ続く。

娘を連れて日本へと戻った母親の柏木加奈子は、生活していくために、女優への復帰を模索した。しかし、グレイブ・ポートマンと結婚する時、周囲の反対を押し切って駆け落ち同然でアメリカへと渡った彼女に対する目は厳しく、自身の女優復帰は難しかった。

ならばと彼女が考えた手段が、娘をタレントとして売り出すことであった。お世辞などではなく、アシユリーは超がつくほどの美少女で、それは年齢を重ねるごとに拍車がかかっていた。身体が成長すれば、当然、大きくなる部位もある。彼女の乳房や臀部は、同年代の女子と比較して、いや、トップクラスのグラビアアイドルと比較しても立派なモノであり、それは世の男性たちの欲情をそそって

やまなかった。

アシュリーの夢は父親と同じマジシャンの道を進むことであり、グラビアという身体を売るも同然の行為には少なからぬ抵抗があったのだが、母親の懇願に近い頼み事を断れるはずもなく、かくして彼女はタレントとしてのデビューを果たした。

その評判は上々で、母親のプロデュース力も相まって、アシュリーはたちまち二世タレントとしての地位を確立した。テレビ番組にも出演し、CMの契約も結ぶことができた。学業とタレント活動の両立は、決して楽な生活ではなかったが、アシュリーの日本での生活は極めて充実しており、それは幸先のよい船出と言っても過言ではなかった。

しかし、順風満帆と思われた航海は、想定外の方向からやってきた嵐によって座礁することになる。母親の加奈子にガンが発覚したのだ。

加奈子は娘を売り出すため、業界関係者との会食を重ね、連日のように不摂生な食事や飲酒を繰り返していた。そして、溜まりゆくストレスを発散するために、タバコも吸うようになっていた。それらが原因か定かではないが、とにかく、加奈子の身体がゆっくりと蝕まれていたことだけは確かだった。

「おかしい……何かがおかしい……」

自分でもかなり前から体調に違和感を覚えてはいたのだが、娘のマネジメントを優先して病院に行くことを先伸ばしにしていた結果、違和感は悪化の一途を辿った。便秘や下痢を繰り返し、時には熱発が、時には嘔吐が起こる。食欲が不振となり、体重も減ってきた。血便が出てようやく行った病院でした検査の結果、進行した大腸ガンが発覚した時はすでに肝臓に転移した後だった。

母親のガン発覚をきっかけに、順風だったアシュリーの芸能生活も頓挫することになる。仕事を取るか、それとも母親に寄り添うか。選択を迫られたアシュリーに、母親は仕事を選ぶよう促したが、腹を抑え、脂汗を流しながら苦しむ母の姿を見て、放っておけるほどアシュリーの心は非情になれなかった。彼女が下した選択は芸能活動の休止であり、その期間は二年に及んだ。

大腸ガンは決して治らない病気ではない。他のガンと比較しても治癒率は高く、ステージ四でもかなりの確率で治る。それに、蓄えもあった。

「大丈夫。きつと、ううん、絶対に治る！ 絶対に、絶対に……」
まるで自分に言い聞かせるように言いながら、アシュリーは懸命に母親を支えたが、運命は彼女らに味方をしなかった。母親の病状は悪化の一途を辿り、ガン発覚から一年八か月後に亡くなってしまった。

若くして両親を亡くしたアシュリーは、その後、しばらくの間、学校にも行かずに自宅に引きこもる生活を送っていたのだが、一念発起して再び前を向いて歩きはじめた。

「このままじゃ、ダメ。このままじゃ、パパもママも心配で安らかに眠れないわ。前を向いて、歩き出さない」と

決意を固めたアシュリーは、今度は自分の意志で、タレントとして活躍する道を模索する。幸い、彼女を受け入れてくれる芸能事務所はすぐに見つかった。事務所は、復帰プランの第一弾として、彼女のグラビア写真集を出すことを提案し、アシュリーもこれを承諾した。まだ十代のアシュリーの肉体は、「良い意味」で二年前よりもさらなる成長を遂げていたからだ。出版した写真集は一〇万部の売り上げを記録した。

発売された写真集には特徴があった。それは、着ているビキニは様々で、どの写真を見てもアシユリーの豊満な肉体が惜しげもなく映っているのだが、どの写真でも、アシユリーは必ずシルクハットと杖、そしてマントを着用していたという点だ。これはマジシャンを彷彿とさせる装いで、アシユリーの発案であった。

タレントとしての復帰を決めたアシユリーは、同時に長年の夢であったマジシャンとして生計を立てる道も模索していた。写真集はその第一歩でもあったのだ。

これが当たった。アシユリーは、出演するテレビ番組や動画サイトで、惜しげもなく自らの肉体を晒すと同時に、簡単なマジックを披露して周囲を驚かせ、ついには「グラビアマジシャン」という地位を確立することに成功したのである。それは、一部から疑問や批判の声が上がる手法であったかもしれないが、とにかく、アシユリーは、タレントとして成功しただけでなく、マジシャンとして活躍する場も得るに至ったのであった。

そして、彼女が二十歳になったその日、念願が叶って、アシユリーは単独のショーを開催することになった。会場は彼女のファンで溢れかえっており、空間を満たし尽くすような拍手が沸き起っている。そこに登場したアシユリーは、いつものようにビキニ姿で登場し、晴れやかな表情で幾つものマジックを披露して成功させていった。そして、最後、父親が失敗した水中脱出マジックを披露するために、箱の中に入って……そのまま、永延に姿を決してしまった。

まるで、異次元にでも踏み入れてしまったかのように……。

続きは是非とも本編でお愉しみください。